

西トップ遺跡の建築調査

—2019年度の成果—

1 はじめに

西トップ遺跡の調査修復事業は、現在中央祠堂の解体が終了し、再構築作業が進められている。これまで建築的調査として、中央祠堂砂岩外装内部のラテライト製基壇の調査を継続しておこなっている。2018年度の段階で、ラテライト製基壇の南半分の調査をおこない、前身建物にともなうと考えられていたラテライト製基壇が、現在の中央祠堂躯体部と同時期であり、砂岩外装がその後の増築である可能性を指摘した¹⁾。

2019年度は、中央祠堂砂岩外装の北半分を解体し、前年度の成果と合わせてラテライト製基壇の全貌があきらかとなった。また、中央祠堂東面および東テラス内部の一部を解体し、西トップ遺跡の改造過程について検討をおこなった。加えて、類例調査としてアンコール・トム王宮内にあるテラス遺構の調査をおこなった。

2 中央祠堂内部ラテライト製基壇

ラテライト下成基壇の構造 中央祠堂北東隅部の解体では、地下部分を掘り下げ、ラテライト下成基壇の地下構造について調査をおこなった。その結果、下成基壇延石の下に3石のラテライト切石（以下、地業石とする）が挿入されていることがあきらかとなった（図77）。この地業石は、基壇の沈下を防止するための基礎の役割を担っており、おそらくラテライト製基壇全体に敷設されていると考えられる。



図77 ラテライト下成基壇の地業石（東から）

階段の形状と基壇との位置関係 背面にあたる西面では、上成・中成基壇にともなう階段に加えて、下成基壇に敷設された階段を確認した（図78）。上成基壇の階段は、後に砂岩の基壇外装を設置した際に、一番外側の階段石は取り外されていたが、当初の階段は上成から中成まで一連の傾斜で設置されていたとみられる。そして、下成基壇最上面（葛石1石目）の高さで、幅0.5m程度の踊り場を設け、さらに下成基壇の階段が続く。

階段と基壇の位置関係は、上成・中成・下成それぞれで異なっており、それが各基壇の平面形状の違いにも反映されている。上成基壇では、階段は基壇平面の内部へ入り込む形で設計されており、階段の最下段は上成基壇の延石より内側に位置する。中成基壇は、上3段は基壇の内側に入り込むが、下5段は基壇よりも外側に突出しており、この突出部分に耳石を設けている。耳石は、基壇に残る痕跡から、少なくとも5石ある羽目石の上から3石目から下の部分に設けられている（ただし、3石目の羽目石はモールドリングが施されていることから、実際は上から2石目の羽目石から造られていたと考えられる）。下成基壇は、葛石2石目以下の階段全体が基壇から張り出して造られている。

下成基壇の階段は、東面と北面では残存しておらず、南面は砂岩の階段を解体していないため確認していない。ただし、東面では階段突出部の推定位置で石材が抜き取られた痕跡が認められ、地下を調査したところ、前述の地業石が東に屈曲する様子を確認した（図80）。残存状態は良好とはいえないが、階段突出部推定位置の南北両側で同じ状況を確認しており、当初は東面にも西面と同様の階段が取り付けいていたと考えられる。



図78 中央祠堂ラテライト基壇（西から）

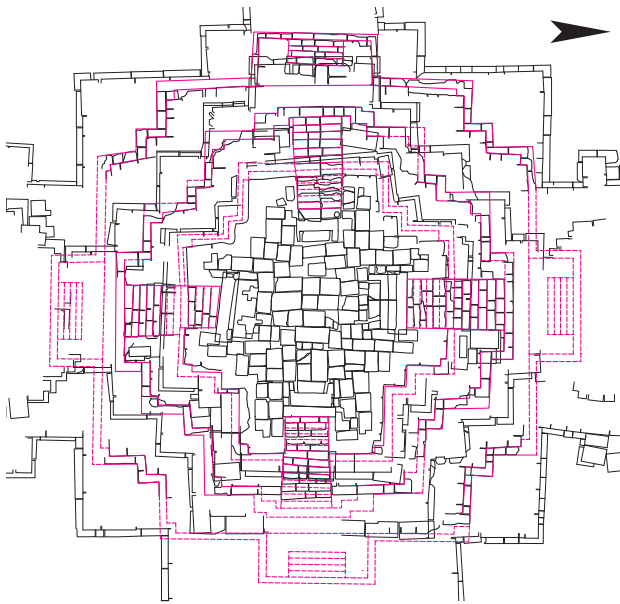


図79 ラテライト基壇平面図 1:200 (太線:残存部分、赤:残存部分から想定)

ラテライト基壇の平面形状 本年度の調査で、ラテライト基壇の全貌がほぼあきらかとなった(図79)。昨年度の成果と合わせて、改めてラテライト基壇の平面形状について整理したい。

ラテライト基壇は、ほぼ正方形の四辺に突出部を備え、突出部の隅に小さな欠き込みを施した形状を基本形状とする。上成・中成・下成基壇のいずれもこの形状を基本とし、中成と下成はさらに階段部分が突出する。また、東面のみ他の3面と比較して突出部分が長く、上成基壇地覆石位置でみると、ばらつきがあるものの東面以外が1.0~1.2mを測るのに対し、東面は約1.8mを測る。2019年度の調査では、ラテライト基壇の形状から、中央祠堂の砂岩製の塔躯体部がラテライト基壇と同時期の遺構である可能性が高いことをあきらかにしたが、東面の突出部が他の3面よりも長いという特徴は、上部の躯体部にも表れており、両者が同時期の遺構である可能性がより高まったといえる。



図80 ラテライト下成基壇東面階段取り付け部分の地業石(北東から)



図81 砂岩石列に残る罫書線(南東から)

3 仏像台座下層遺構

東テラス上の仏像台座を解体し、地下部分の発掘調査をおこなった。その結果、仏像台座の下層から、砂岩とラテライトによる石列遺構と、ラテライトの石敷遺構を検出した²⁾。

石列遺構 仏像台座の真下では、北側は砂岩が、南側がラテライトが東西方向に並んで設置されていた。砂岩石列には裏込めにラテライトが添えられており、上面には罫書線がある(図81)。中央祠堂下成基壇の敷石にも、南祠堂中成基壇を据える際に刻んだとみられる罫書線が確認されており、今回確認された罫書線も、上部に石材を積み上げる際の位置を記したものと判断できる。したがって、この砂岩石列の上部にも、何らかの構造物が設置されていたと考えられ、その規模は罫書線を西トップ遺跡の中軸で折り返して復元すると、南北3.6m、東西2.5m程度となる。

石敷遺構 これらの石列の東に、ラテライトを敷き詰めた南北約3m、東西約2.9mの石敷遺構が接する。この石敷遺構は、外周部の石を配置してから内部の石を並べており、西辺以外の3辺は外周部分の石を一段高く積んでいた。石敷の上面には、砂岩石列のような罫書線は確認できなかった。

掘立柱柱穴 石敷遺構の東に接して、掘立柱の柱穴2基を確認した。南側の柱穴は過去の調査で既に確認していた³⁾が、今回北側の対称位置でも新たに1基を確認した。これより西側では、これらに対応するような遺構は確認しておらず、もしこの柱穴列が建物の一部であるとすれば、この2基を妻面とした東西棟建物が、東に展開すると考えられる。

遺構の変遷 これまでの調査で、掘立柱柱穴が廃絶した後に整地をし、その上に石敷遺構が据えられたという

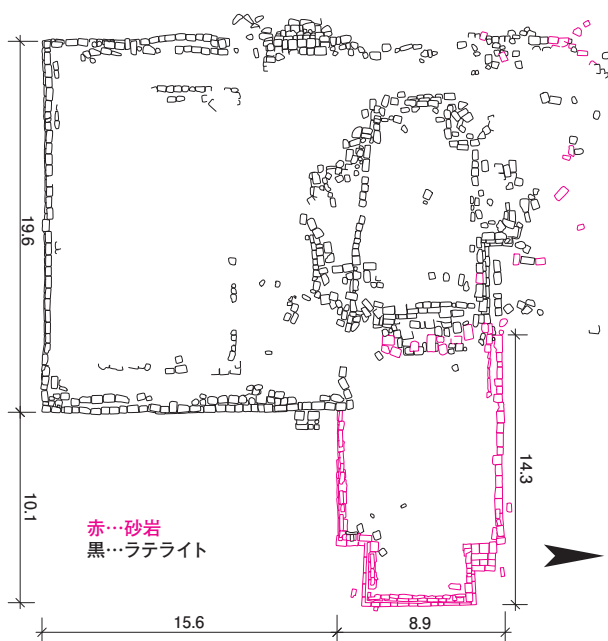


図82 王宮内テラス遺構平面図 1 : 400

変遷が示されていた。しかし、今回より広い範囲で検出をおこなった結果、両者の位置関係から石敷遺構と掘立柱柱穴は同時期である可能性が高い。一方、石列遺構と石敷遺構は、検出面の高さがほぼ同じく、同時期である可能性もあるが、確証はない。

このほか、東テラス外装の内側からも東西に並ぶラテライト石列を約2m分確認しており、東テラスの遺構変遷については今後の東テラスの解体を待ってさらなる検討をくわえたい。

4 王宮内テラス遺跡

西トップ遺跡の類例調査として、アンコール・トムの王宮の区画内にあるテラス遺跡を調査した(図82・83)。

このテラス遺跡は、王宮北門の西南に位置する方形の池のすぐ西に位置する。中央に東西に長い平面を持つ建物があり、その東に東西14.3m、南北8.9mのテラスを備え、建物の南にも東西19.6m、南北10.1mの広いテラスを設けている。前者のテラスは砂岩製の外装を備え、側面には馬や象に乗った人物の彫刻が施されている。テラスの東辺の中央に張り出し部を設けており、この形状が西トップ遺跡の東テラスと似ていることから、その類似性を指摘されていた⁴⁾。

この砂岩製テラスの東張り出し部北側には階段が設けられているが、南側は彫刻が入隅部にもほどこされており、この部分に階段は未設置だったとみられる。

中央の建物は、足元の石材数段のみが残存しており、どのような建物であったかはわからない。石材はすべて



図83 王宮内テラス遺構 砂岩製テラス(南東から)

ラテライトで、東西に長い長方形平面の四面に前室状の張り出しが取り付けられている。南のテラスはラテライトを5石程度積み上げた外装を備える。平面形状からは、当初は砂岩製テラスのみで、後に南にラテライト製テラスを増築したと考えられる。東面及び西面のほぼ中央に階段を設けており、この間が建物の南を通る通路となっていたとみられる。南のテラス上には、わずかにラテライトの石列が確認でき、全体で長方形平面となり、この部分にも建物などの施設が備わっていたと考えられるが、残存状況は非常に悪い。

以上のとおり、砂岩製テラスの形状は西トップ遺跡と類似しているものの、階段の位置や、全体の建物構成などに大きな違いが認められる。今後も、このようなテラス遺構との比較をおこない、西トップ遺跡との関係を検討していきたい。

5 今後の課題

現在、西トップ遺跡は中央祠堂の基壇の再構築をおこなっており、次年度以降東テラスの再構築が予定されている。基壇と中央祠堂躯体部に使用されるリントルとの年代観の違いや、増改築の変遷の詳細についてなど課題に注目し、今後も調査研究を継続していきたい。

本稿には、JSPS科研費 JP19K04830による成果の一部を含む。
(大林 潤)

註

- 1) 大林潤「西トップ遺跡中央祠堂の建築調査 - 2018年度の成果 -」『紀要 2019』。
- 2) 佐藤由似・杉山洋「西トップ遺跡の調査と修復 - 中央祠堂基壇部の解体・再構築 -」本書56～57頁を参照。
- 3) 奈文研『西トップ遺跡調査報告』2011。
- 4) 上野邦一「アンコール遺跡群のうち、未解明の遺跡」『カンボジアの文化復興 (29)』上智大学アジア人材育成研究センター、2016。